

国際交流レター 第10号

新たな交流の飛躍をめざして



新本館落成式出席の姉妹大学代表団を迎えて
(1989年5月27日 新本館前にて)

CONTENTS

新本館落成記念式典挙行さる	2	SEMINARS	20
環アジア地域との交流深まる!	5	平成元年度留学生名簿	21
熊本・モンタナ間の大学交流	9	1989年前期国際交流EVENTS	22
〈特集〉留学生を囲んでの座談会	13		

海外姉妹校が一堂に会し、 新本館落成式典開かる

本学の新本館が完成し、5月27日落成式が行われ、正午から総合体育館で記念式典が催された。式典には、教育各界、同窓生や本学教員ら約700名のほか、本学が姉妹提携しているアメリカ・モンタナ州立大（D. クラーク国際教育局長夫妻）、キャロル大（T. シュインデン教授・前州知事）、モンタナ大（R. ソルバーク教授）、韓国・大田大（呉熙弼総長他7名）、中国・深圳大（俞仲文助教授・学長室主任）から総勢13名の代表団および交換教員、交換留学生も出席。岩野茂道学長が「地域の教育研究の充実、文化学園都市としての発展に寄与するため今後も努力したい。」と式辞を述べ、姉妹大学関係者らとともに新本館前でテープカットした。また、式典に先立ち、午前11時から姉妹校の代表者と本学理事長、両学長らによって記念植樹式も行われた。岩野学長より「姉妹大学との交流がとこしえに発展しつづける象徴として、県木であり常緑樹の楠（くすのき）を選んだ。」と挨拶、植樹式を契機に、姉妹校との末永い友好とより一層の国際交流の発展を誓いあった。また、午後3時から、本学代表者と姉妹大学代表者との交流対話が本学特別会議室で開催された。

本学を軸として、日・米・韓・中の4ヶ国6大学代表団・関係者が一堂に会し、お互いの友好を深め合ったことは、本学の建学精神である「全学一家」の国際版ともいえるもので、本学園史上、画期的な試みであった。

“世界に拓く^{ひら}21世紀の熊本との交流” をテーマに対話

新本館落成式に合わせて、午後3時から姉妹大学代表者を迎えての交流対話が催された。本学からは岩野商大学長、園田短大学長、清野国際交流委員長が出席。また田尻靖幹熊本市長も同席して、平野敏也熊日新聞博物館長による司会ですすめられた。

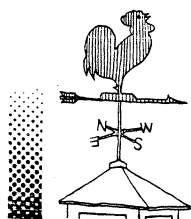
国際交流の理念と意義について、各代表者から貴重な発言が聞かれた。「アメリカと日本、



交流の発展を願って楠を植樹

韓国、中国が対抗者ではなく共に戦うチームメートとなるべきで、それを実現するには、各国間の相違を認め合うことが必要」(D. クラーク氏)、「広い視野と国際的な展望をもった、より柔軟性のある教育システムづくりを」(T. シュインデン教授)「21世紀は“世界市民”ということが、教養ある人々のもっとも高い目標の一つになるだろう」(R. ソルバーグ教授)、「韓国のことわざに“類類相從(類は友を呼ぶ)”というのがあるが、不可分密接な同伴者として、太平洋時代への新しい起爆剤」(呉総長)、「中国には、相知れば遠近なし、万里といへども隣となる、という古詩があるが、これこそ国際交流のもっともよい例え」(兪氏)。また日本側からは、「国際交流は漢方薬のようなもの。お金はかかるが、長い期間をかけて徐々に効き目が出てくる」(岩野学長)「国際交流のポイントは、その国の個性をつかむことと、逆に自分の個性を相手に知らせること」(園田学長)などの意見が出された。

さらに、D. クラーク氏より「現在われわれは熊本商大・熊本短大を軸にして姉妹関係を結んでいるが、これを機会に各校が相互に関係を結び、国際的なグループをつくることはできないか」との提案があり、大きな賛同が得られた。



活発な意見が交わされた対話



5月27日午後6時から、姉妹校代表団を迎えて熊本ホテルキャッスルで歓迎レセプションが催され、約150名が参加し、交流を深め合った。

清野交流委員長、岩野商大学長がそれぞれ歓迎の挨拶を述べたあと、松村理事長の乾杯の音頭で夕食宴にうつった。

大田大学校を代表して挨拶にたった呉理事長は「韓国のことわざに“親戚の親戚”というのがあるが、熊本商大・熊本短大を媒介にして、モンタナ大、モンタナ州立大、キャロル大と大田大、深川大は皆一つの大家族です。」と述べ、またD. クラーク国際教育局長は「熊本商大・熊本短大との家族的な友好関係に学んで、私の大学では最近マクロファミリー論を教授している。」と、姉妹交流による一つの成果を披露した。

レセプションはなごやかな雰囲気の中で進み、園田短大学長の閉会の挨拶で終了した。



なごやかな雰囲気歓迎レセプション



姉妹校代表団を迎えて、5月26日から4日間多彩な行事が催されたが、公式行事の合い間にも、各代表団を囲んでの「茶話会」などももたれた。

深圳大の俞仲文・学長辦公室主任を囲んでの茶話会には王交換教授と交換留学生の羅君、仰君を含め13名の学内の友人が集い、歓談した。俞助教授より「戦後の日本経済は高度成長と最近の安定成長という2つの奇跡を果たしている。その原因と起動力はどこにあるのだろうか」との問題提起があり、それぞれの参加者から興味ある意見が交換された。

姉妹大学の代表者を招いての本館落成式等の行事日程表

国 別	米 国 ・ モン タ ナ 州	韓 国	中 国
来 訪 者 (大 学 名)	ドン・クラーク国際教育局長夫妻 (モンタナ州立大学) テッド・シュインデン前州知事 (キャロル大学) リチャード・ソルバーク教授 (モンタナ大学)	呉 應 準 (理事長) 呉 熙 弼 (総長) 呉 應 淑 (理事) 金 保 成 (理事) 尹 允 老 (理事) 姜 南 伊 (理事) (大田大学校) 李 正 斗 (KBS記者) 任 亮 宰 (MBC記者)	俞 仲 文 学長辦公室主任・助教授 (深圳大学)
月 日	時 刻	行 事	
5/26(金)	18:00~20:00	歓迎夕食会	
5/27(土)	9:00~ 9:30~11:00 11:00~11:20 11:20~11:40 12:00~ 13:00~14:40 15:00~17:00 18:00~19:30	ホテル発 (随時) 表敬訪問及び懇談会 (各大学ごとに約10分程度) 姉妹大学代表団記念植樹式 高橋守雄先生胸像除幕式 本館落成記念式典 祝賀会 姉妹大学代表団との対話 姉妹大学代表団歓迎レセプション	
5/28(日)	9:00~ 10:30~11:30 12:00~13:00 14:00~14:30 14:30~ 15:30~ 18:00~19:30	ホテル発 阿蘇国立公園見学 昼食 テクノポリスセンター見学 熊本市内へ向かう (宿舎へ) 茶話会 送別夕食会	
5/29(月)	10:00	お見送り 日本を出国	

環アジア地域との交流深まる！

中国広東省経済特区の深圳大学と熊本商科大学・熊本短期大学との姉妹校提携のための協定調印式が1987（昭和62）年12月19日本学キャンパス内で催された。深圳大学代表団長の羅微啓学長と本学北古賀勝幸学長（当時）が姉妹校提携締結宣言文ならびに学术交流協定書を取り交わし、本格的交流が開始されることになった。

深圳大学との交流は、1986年の夏、本学の田島司郎教授と中野裕治助教授が深圳大学に招聘されて、3週間、経営学の集中講義をおこなったことにより先鞭がつけられた。その後、菅本学教授を団長とする調査団8名が深圳大学を訪問し、さらに1987年6月には、本学海外事情研究所と深圳大学特区経済研究所との学术交流協定が締結され、この協定に基づいて、両研究所員のプロジェクトチームが、日中合弁企業の実態調査や経済特区の現状と課題などのテーマで相互に訪問するなど、多くの学术交流が積み重ねられてきた。

今回の姉妹校提携により、協定に基づいて教員1名、学生2名の相互交換が毎年行われることになった。調印式には深圳大学調印団5名のほか、本学からも約200名が列席し、厳粛ながらも友好的な雰囲気のもとで閉幕した。



深圳大学との姉妹校提携調印式
1987年12月19日

深圳大学との交流協定概要

- 教員の交換
隔年毎に一名の教員を相互に派遣交換する。本人の同意があれば専門教育を担当することができる。
訪問期間は最長1年とする。
交換教員の派遣旅費は派遣大学が負担し、受入れ大学は生活手当を支払い、宿舎、医療保険および必要な研究条件を提供する。
- 学生の交換
毎年2名の学生を交換する。
受入れ大学での単位取得を認める。受入れ大学は学費を免除し、宿舎を無料で提供し、生活手当を支給する。
- 資料の交換
- 科学研究の協力と研究成果の共有
- 本協定の履行プロセス
- その他

※ 姉妹校提携後の交流状況

“深圳大学” 管見

〔公的行事〕

教養部 教授

永末嘉孝

1988. 4 / 11 北古賀学長ら5名が深圳大学を
答礼訪問
- 5 / 25 深圳大学特区経済研究所の研究
調査団5名が海外事情研究所の
招聘により来学
- 12 / 1 深圳大学創立5周年祝賀のため、
松村理事長、岩野商大学長らが
深圳大学訪問（これに先立ち、
田島司郎教授ら5名が9月27日
に挙行された記念祝賀会に参列
した。）
1989. 5 / 27 新本館落成式へ深圳大学学長弁
公室主任兪仲文助教授が列席

昨年4月、北古賀学長（当時）、清野国際交流委員長、改原事務局長、西村国際交流係長、永末国際交流委員の一行5人は深圳大学を答礼訪問、羅徵啓学長は「深圳大最初の外国の姉妹大学、最も親しい大学からの貴賓」と熱烈歓迎してくれたが、ここでは学長自らご案内くださった図書館について記してみよう。

6階建、23,000㎡、計画蔵書100万冊、現在35万冊と聞いて一びっくり。というのは開学5年目にして商大と同数なのだ。全館開架式、検索など全てコンピューター導入。閲覧座席1,200、市民にも開放、満席で座れないこともある。朝8時半から夜12時まで開館、それも365日、春節すら休まない。これは学生が交代で勤務に参加しているから可能の由。

学生たちは学内でホテル、レストラン、銀行等も経営、まさに理論と實際を結合して学んでいるわけであり、これこそが深圳大の活気の根源であろうと思われた。

〔交換教員・交換留学生〕

1988. 9 / 8 第1回交換留学生出発
松山泰広君（経営・4年）
高木浩規君（経営・4年）
1989. 1 / 24 第1回交換教員来学
王 曉敏先生（経営管理論）
第1回交換留学生来学
仰 英姿さん（岡本教授担当）
羅 剛君（坂本教授担当）
- 2 / 1 第2回交換留学生出発
伊藤幸太郎君（経営・2年）
林田真奈美さん（商・4年）
- 9 月 第2回交換留学生来学予定
廖 東鳴君（経・3年）
劉 凱東君（商・4年）

深圳大学訪問記

熊本学園理事長 松村武雄

昨年12月1日から5日間の日程で、岩野熊本商大学長らと深圳大学を訪問しましたが、羅徵啓学長らの熱烈な歓迎を受けて強い感銘を受けました。歓迎式場では両国国旗の掲揚のあと、両大学の永遠の親交を祈念して、榕樹（ガジュマル）の植樹を関係者一同で行なって、親睦を深めることができました。

深圳大学校内施設が急速に拡充されている現況には驚きましたし、広大なキャンパスを見ては、羨望の念を禁じ得ませんでした。また本学から同大学に留学中の高木、松山両君とも親しく面談の機会を得ましたが、両君が元気で勉学に励んでいる様子を見て、心強く思いました。

今後両大学の姉妹提携の実行が益々あがり、両国の友好に貢献することを信じて、帰国の途についた次第でした。

深圳大学特区経済研究所より 海外事情研究所へ訪問団

海外事情研究所所長 岡本 恵也

当研究所の招聘により、1988年5月下旬に深圳大学より次の5名が来熊された。深圳大学副学長・鄭天倫先生、同大経済学部長・張敏如先生、同大特区経済研究所副所長・陳灼華先生、同・王曉敏先生、同大学長事務室秘書兼通訳・侯梅芳先生。26日の学生・一般向けの講演会（鄭先生）、27日に教員向けの研究会（張先生）、28日には市内のビル会議室にて企業向けのシンポジウム（陳先生）を開催して、深圳経済特区の現状と課題が詳しく伝えられた。

また、滞在中には、新聞社や工場等を見学、休日には阿蘇観光も楽しんだ。

今回の訪問で、姉妹提携締結以来の両研究所の学術交流と友好関係は益々増進した。



INTERVIEW

交換教授 王 曉 敏 先生

美しい風景に囲まれ、道路も整備され、清掃の行き届いた静かで落ち着いた街なみを持つ熊本の町が私は気に入っています。また閑静で通勤にも便利で、設備の行き届いた住居と立派な研究室を提供して戴き、現在の生活を楽しんでいます。

来日以来、学術交流のみならず、新らしく菊陽町の住民、役場の職員、子飼商店街青年会の皆様とも民間交流が生まれ、私の活動範囲も広がってまいりました。これもひとえに本学の先生方が国際理解を深める為、いろいろと機会を作ってくださいのおかげです。

英国のロマン派の詩人バイロンが世界を一冊の本に、一つ一つの国をその一ページにたとえています。中国にのみ暮らしてきた私は今、別の一ページを読んでいるという感慨に浸っています。

日本をもっとよく理解する為にも、この私の体験を追体験してもらおうよう、深圳大学の私の同僚に呼びかけたいと思っています。

大田大学校との交流、着実にすすむ！

韓国・大田大学校とは、昨年度より交流内容の見直しが進められていたが、昨年10月に新たに交流協定書が交わされ、現在この新協定により、教員の相互交換、学生研修団の受入れなどが行われている。

大田大学校との交流協定概要

○教員の交換

毎年1名の教員を相互に派遣交換する。交換教員は母国語の授業を担当する。訪問期間は最長1年とする。交換教員の派遣旅費は派遣大学が負担し、受入れ大学は生活手当を支払い、宿舍、医療保険、必要な研究条件を提供する。

○学生の交換（注：現在協議中）

○学生・教職員の短期研修

○資料の交換

○科学研究の協力と研究成果の共有

○本協定の履行プロセス

○その他

※ 前半期における大田大学校との交流状況

1989. 2 / 9 第3回交換教員・金寛洙先生
帰国

3 / 13 第2回交換教員・宮崎俊策先生
出発

4 / 3 第4回交換教員・金麟濟先生
来学（本年8月まで）

7 / 5 第3回大田大学校・学生研修団
37名来学（7月10日まで）

第3回大田大学校研修団滞在日程表

期 日	日 程
1989年 7月5日(水)	日本に入国 (ソウルー熊本) 歓迎夕食会
7月6日(木)	学長表敬訪問 特別講義受講 熊本市内見学(水前寺公園等・数箇所)
7月7日(金)	熊本放送見学 県知事表敬訪問 本学学生とのスポーツ交流会
7月8日(土)	アジア太平洋博覧会見学
7月9日(日)	自由行動
7月10日(月)	送別会 テクノポリスセンター見学のあ と日本を出国 (熊本ーソウル)

熊本商科大学印象記

大田大学校 金 寛 洙



世界的な大学として飛躍して行く姉妹校の熊本商科大学に私としては2回目の交換教授として選ばれ、1988年2学期の半年間、主に韓国語講座を担当しました。

私は1986年の1学期も招聘教授としての経験を思いだしながら、個人的な教育目標を設定して計画を立て、教育資料を準備して福岡国際空港を経由して熊本に到着しました。半年間の短い熊本の生活でしたが、私にとっては熊本が第二の故郷のように考えられ、親近感があり幸せな生活でした。

大田大学校と熊本商科大学に姉妹関係が結ばれ、九州地方では二番目に第二外国語として韓国語講座が開講され、私が初めての講義を担当するようになり、pioneerとしての心技と韓国語を教えながら韓日間の理解を日本の大学生達と論議するようになり、意味がある価値を捜すようになりました。

私が考える教育目標は、教授と学生相互間の人間的人格の交換です。私はこのように教育哲学を持って学生達に臨みました。私の半年間の生活中わすれることが出来ない主な印

象は、熊本商大が国際交流室という機構を持って、国際的な交流に関係する色々な事情の資料を収集して教授・学生達と交流しながら学問的に量的、質的な面で深い理解をする点に対して私は大きな感銘を受けました。

私が福岡空港に到着した時、国際交流委員長と職員達の温かい友情のお出迎え、また親切なお心遣い、交換教授が住む野村コーポアートの施設と家財道具準備の緻密性は、うまく表現する事が出来ないくらい立派でした。これは交換教授の活動をより極大化させる最善策であると考えても良いでしょう。私はこのような印象を持って、国際的交流の趣旨にあてはまる講義を遂行しようと思って最善の努力をしたし、学生達も私の講義に誠意をもって応じてくれました。熱心に勉強または研究する学生達の受講態度は、熊本商大の教授達の人格と学生達の学習熱が昇華結実された結果でしょう。途中の2学期から講義しました韓国語ですが、学期末頃は簡単な意志が通じる学生達が多く目につきました。特に、韓国の歴史と文化に対する関心を持って質問する学生達、また、植物の方に関心を持つ学生達は熊本地方の県木のように考えられる韓国の国花「無窮花」に対する質問、银杏の実の収集等、これは近い異国の韓国語に対する学生達の高い関心度がもたらした結果だろうと考えました。

熊本商科大学は、社会科学を研究する大学として、立派な施設を持って、立派な学風が樹立発展しておりました。校門前の银杏の並木から始めまして椰子類、クスノキ、イヌマキ、サザンカ、ツバキ等南方植物にかこまれている美しいキャンパスに、最新式施設を持つ新築された本館を中心にして適切に配置してある校舎の中で、研究且つ講義するその姿は学ぶ楽園でした。大学の図書館、教授達が利用する研究棟の図書室には多数の図書が正しく整頓されており、私の参考になる文献資料も比較的多かったし、利用する参考文献資料の自由なコピー、特に交換教授が自国の消息をわかるように配架された新聞は4、5日

程度遅れて見る事が出来ますが、他国で活動する我々に対しては、大きな慰労となるものでした。また研究棟の雰囲気も静粛で安定感がありましたし、中には助言協力してくれる親切的な教職員の友人達も多かったのです。真心から感謝しております。研究棟前の新しく整理された庭園には1、2年前に移植されたと思う色々な植物も新梢をのぼして、自然の姿にもどっている大学のキャンパスは、本当に躍動しておりました。

岩野学長の緊縮政策の大学運営哲学は、将来を見る目であり、世界的な大学として進歩する方案の一つでしょう。「苦あれば楽あり」と言う言葉が考えられます。

わが熊本商科大学の永久的な発展をお祈りします。(日本語による原文のまま)



INTERVIEW

交換教授 金 麟 濟 先生

道路・建物が整備され、清掃の行き届いた、緑が豊かで美しい町並を持つ熊本の町の素晴らしさに感銘しています。閑静で通勤にも便利で、設備の整った住宅と快適な研究室を大学から提供して載き感謝しています。

韓国人は文化に関しては、河の流れの如く、古いものをあっさりとして捨て去り、次々と新しいものを取り入れていく傾向があります。他方、日本人は湖が古い水の上に新しい水を堆積していくように、文化面では古いものと新しいものを見事に調和させて、長年の伝統を継承していく点に敬服いたしております。

実際に日本に住み、市民たちとの接触を通して初めて日本に対する真の理解が可能だと痛感しています。大昔から、韓国は東方の礼儀の国と称されてきましたが、日本人の豊かな公共心を目の当たりにして、私は、韓国の人々は日本人に負けない礼儀正しい国民と誇れるように一段と努力しなくてはだめだと悟りました。

新たな飛躍をめざす 熊本・モンタナ間の大学交流

—四大学間交流プログラムの開始—

1982年7月、モンタナ大学システム(2総合大学・4単科大学)及び3つの私立大学からなる9つの大学との姉妹校締結がなされて以来、本学では主にモンタナ州立大学(MSU)やキャロル大学、ロッキーマウンテン大学との間で交換教授(長期)、交換留学生(短期)、サマープログラムによる学生・教職員の短期研修などの実績が積み重ねられてきた。

1988年度より、モンタナ州立大、モンタナ大、熊本大および本学との間で四大学間交流プログラムが開始された。これは、日米友好基金からの助成を受けて、当面3年間のプロジェクトとして行うもので、交流の内容は、①毎年教員1名と学生1名を1年間、相互に派遣する、②基金より教員に対して渡航・滞在費の助成、学生に対して授業料免除、③学生は30単位以内での単位互換を認める、といった点を骨子としている。

この協定にもとづく交流の実績は次のとおりである。

1988年

4/5 落合俊行先生出発

8/25 田中久博君(経済・3年)出発

1989年

1/9 J. フートン先生着任

2/1 春期短期派遣留学生(4名)出発

3/23 橋本祐二君(経営・3年)出発

4/2 田中利彦先生出発

9月 C. モンティン先生着任(予定)

なお、本年6月6日、キャロル大学よりMs. J. グリーンヘック、Mr. J. R. フォイツの両君が短期交換留学生として来学した。また、MSUからの今夏のサマープログラム研修団はMSU側のスケジュール等の都合により中止となった。

Profile

—C. モンテイン先生—

四大学間交流プログラム交流協定に基づく交換教授としてモンタナ州立大学(MSU)からクリフ・モンテイン博士(Dr. Cliff Montagne)の来日が決まった。モンテイン準教授の専攻は土壌学、特に雪崩に関する研究を中心的なテーマとされている。教授は昨年、卓越した講義を行った教員に対して贈られるTeaching Awardを同大学で受けられており、熊本での講義が待たれる。ご家族同伴でこの夏に来熊され、約9か月間にわたって滞在される予定である。

なお、協定締結以来本学への交換教授はモンテイン先生で2人目(モンタナ州立大学からの交換教授としては通算4人目)となる。

モンタナ滞在印象記

教養部助教授 落合俊行

帰国して1ヶ月半ほどになる。早くも、モンタナのどこまでも広がる紺碧の空とひんやりした新鮮な空気、そして美しい山々に囲まれたボウズマン市の静寂さとゆったりした生活リズムが、懐かしく思い出されてならない。

モンタナ州立大学では昨年の5月からインターナショナル・ビジネス・クラブ主催の語学講座の一つとして、また9月からは正規の授業科目(各学期4単位)として、今年の3月まで日本語教育を担当してきた。受講生はMSUの学生ばかりではなく、教職員、ビジネスマン、弁護士、主婦といった社会人も含めて約30名。いずれも日本の経済・社会・文化に強い関心をもった、したがって非常に真摯な学習態度の学生ばかりであった。月曜から木曜までの週4回、授業の準備に追われながらも結構楽しく授業をすすめることができたのも、このような実に気持ちのよい学生や素晴らしいスタッフにめぐまれたおかげ、と

感謝している。

ところで、外国語学習ばかりでなく国際相互理解というものも、まず相手のこと(国)に関心や興味をもち、相手のことを知りたいという姿勢をとることからスタートするのではないだろうか。人種差別問題をテーマにしたTV討論会で、ある黒人女性が、何でもいいから、たとえば黒人は毎日髪の毛を洗っているのか、といった日常的なことでもいいから、私達にもっと関心をもってきてほしい、と真剣に訴えかけていたことを想起する。相手側に対する無知、無関心、あるいは擬装無関心は自らを偏見や独善の殻に閉ざし、自己文化中心主義的な考えや態度となって現われる。また、異文化へのアクセスとならんで重要なのは、自国を相手側に知ってもらい、理解してもらい努力を怠ってはならない、ということであろう。長い間、外国の情報「受信」に躍起になっていた日本は、今こそ「発信」の過程に精力を傾注して、日本の姿、日本人の主張を世界に示す必要があろう。そうでなければ、ライシャワー博士がかつて喝破した「極東の舌のもつれた巨漢、ニッポン」というイメージは、いつまでたっても払拭されないであろう。

人と人、国と国の交わり、国際相互理解の楽しさ、難しさ、大切さなど、さまざまなことを教えてくれたモンタナ滞在。日本語を教えることを通して、多くの人びとと知人・友人となり、実に多くのことを学んだ。また、教会で出会った人たちの溢れんばかりの、心に沁み入るやさしさ、そして最後の授業の日、学生一人一人と感謝と別れの握手をしたとき、どの人も強く握り返してくれたあの手のひらの感触を僕は生涯忘れることはできない。素晴らしい大自然と素晴らしい人たちに囲まれながら、この1年間実に多くの貴重な体験をさせていただいたこと、熊本学園ならびに日米友好基金に心から感謝している。



国際交流覚書

モンタナ州立大学準教授

ジョン・フートン

私達の行っている国際交流のプログラムは、お互いの文化を体験するためのとても素晴らしい方法である。私は、多くの人々に会い、色々な土地を訪ね、様々な文物に触れるためにたくさんの機会を親切に与えていただいたが、同時に私自信が私自信の行動として人と出会い、知らない土地を訪ね、日本の文物に触れるための時間をも与えていただけた。もちろん私はここで仕事を持っており、忙しく授業の準備をしている時も、また授業をしている時も、実に楽しく過ごしているのだが、それに加えて、普通の観光旅行者が体験することのできない、ひとつの文化に浸りきってしまうという状態を体験する時間をも与えられているのである。この文化に浸りきるという行為によって、金色に輝く何かがこの縮小し続ける世界に訪れるのである。すなわち「理解」ということ。

アメリカでは、旅先から帰って、行った先の国のことを「旅行で行くには良いところだよ、でも住みたいとは思わないね。」と話す観光旅行者のことを、よく冗談の種にする。私にとっての熊本は、それとは正反対のものになってしまった。つまり、住むのには素晴らしいところだが、しかし単なる旅行でここを訪れようとは思わないのである。少なくとも普通の観光客のように表面的な旅だけはしたくない。この数ヶ月間、ここで暮らしてきた結果として、私の経験は観光客のする経験より、より深く、より自分自信のものとなった。

では私は、ここで何を見たのだろうか。日本の文化は色々な点でアメリカの文化と異なっているのだが、人間の価値観はむしろ著しく

似ている。公職に就いている人でも金で買収されることがあるし、また他にも（恐らく海の向こうの私達の側の方が多いのであろうが）隣人に暴力をふるう者もいる。が、ほとんどの人々は懸命に働き、人生というものを理解し又楽しもうとするのである。私達が子供たちに、価値観や彼らに必要なと思われることの全てを教えようとする間にも、子供たちはまたたくまに成長していき、もっともっと早く成長しようときえする。アメリカ南部では、素晴らしい「南部の厚いもてなし」についての話をよく耳にする。私達は、いつでもお互いに相手から多くのことを学ぶことが出来るのであるが、私の新しい熊本の友人達は、人に対するもてなし方について、他の人から学ぶべき事はもうほとんどないのである。

「熊本流のもてなし方」は、この上もなく素晴らしいものなのである。もうひとつ、類似点を認めることができた分野は、テレビである。いずれの国においても、サムライやカウボーイ、或いは刑事達が犯人を追いかけ、捕まえて、現実に存在するには凶悪すぎる悪者達をこらしめる。そして、これらの冒険と冒険の間に、ハンサムな男達や美しい女達、可愛い子供達がいっせいに、私が必要としてはいないものを押しつけようとしてくる。フェアにするために付け加えると、良質で教育的で教養を高めてくれるようなテレビ番組も、両国において制作されているということをおかなくてはならない。私の得意分野である「食べ物」については、容易に多くの相違点を見出すことができる。ここに滞在している間、できる限り沢山の日本の食べ物を料理したり、食べたりしようと心がけてきたが、オチ・ヒロトモ博士がその著書「EAST MEETS WEST」の中で述べておられるように、最高の食事というのは、私達双方のそれぞれの最高の料理を組み合わせたものなのである。で

は、一体なにが違うということになるのでしょうか。これらの事や他の多くの事を考えてみた上で、何が違うと言えるのだろうか。

私の滞在についての真の報告書には、ある後悔が記されなければならない。すなわち、私は、私を迎えてくれた人々の話す言語をほとんど使うことが無かったのである。私にとって幸運だったのは、——それは実際に、私達の間の交流を可能にしてくれるものであるのだが——とても沢山の日本人が英語に対して広い知識を持っているということである。私も少しずつ日本語を理解し、話すようになってきてはいるが、それでも尚、多くの友人、同僚、学生達の英語の流暢さには驚かされる。また、この異国の文化について、他にも多くの珍しく新しいものを、ゆっくりではあるが理解し、受け入れるようになって来てはいるが、極くわずかではあるが、私にとって理解し受け入れることが最も困難だったことのひとつひとつのことについては、私はある明確な意見を持っている。つまり、それでうまく行くんだ！と。

皆さんと共に暮らし、働き、遊ぶことを今日まで楽しんできたが、皆さんのお別れの準備をしなければならぬところまで来てしまった。それに私は、このエッセーの結びの文句をも書かなければならないのだ。しかし、最近になってやっと気づいたのだが、真の結論というものは存在しないのである。私達はただ、折にふれて経験したことのひとつひとつについての報告をするために、立ち止まりながらも前進を続けて行くのである。前進を続け、発展を図り、また改良を加えていくのである。今日報告されたものが明日も同じように報告されるとは必ずしも限らない。だからこのエッセーについても、適切なもの或は最善のものであるとは言えないであろう。これは今日現在の報告に他ならないのである。

TOPICS

日米友好基金理事長一行 本学へ表敬訪問——

去る5月29日、日米友好基金のキャンベル理事長ご夫妻、スローン事務総長、ガングロフ事務総長代理兼在日代表の一行四名が本学を訪問し、商大・短大両学長と会見した。会談はなごやかな雰囲気の中で行われ、同基金の助成によって推進されている四大学間交流プログラムが順調に行われていることが確認された。

周知のように本学の国際交流は、1982年、米国モンタナ州の9大学との姉妹校提携調印によって始まり、MSU（モンタナ州立大学）との間に隔年の交換教員制度を設けた。更にその後、1987年10月には四大学（モンタナ大学、モンタナ州立大学、熊本大学、熊本商科大学・熊本短期大学）間交流協定に調印し、現在では交換教員を毎年相互に派遣するに到っている。四大学間交流プログラム発足に伴い助成を行ってきたのが日米友好基金であり、援助はずでに2年目になる。

同基金は、日米両国の教育、学術、文化の発展のために設立され、幅広く助成等の活動を行っている著名な団体である。それだけに本学の国際交流プログラムの一つが同基金の助成によって運営されていることは名誉であり、その意義は大きい。来年は四大学間交流プログラムの3年目を迎え、予定された最終年度となるが、この交流が大いなる成果をあげるとともに、継続して推進されることが望まれよう。

モンタナクラブが結成さる

熊本県とモンタナ州との交流を促進させ、支援する目的で「モンタナクラブ設立総会」が5月19日、熊本厚生年金会館で開かれた。

本学からは、発起人の一人である清野健国際交流委員長の代理として西村禮二総務課国際交流係長が出席した。

このクラブはモンタナを愛する県民の方々にも参加を呼びかけている。

特集 国際交流を考える (1)

ライフ&スタディ IN くまもと

—— 留学生を囲んでの座談会 ——

本学は、1982年のモンタナ大学システム（2総合大学・4単科大学）及び私立大学3校からなる、アメリカの9つの大学との姉妹大学提携を契機に、国際交流事業を積極的に推進してきた。近年においては、国際政治・経済の変容に対応しつつ、環太平洋地域との交流を積極的にすすめることが国際交流事業の重要な柱の一つと位置づけられている。

現在、本学には多くのアジア人留学生を中心に27名の外国人留学生が学んでいる。そこで今回は、本学に2年間以上在籍している外国人留学生（交換留学生も含めて）のうち、数名の方たちに集まっていただき、熊本での生活体験や学習環境などについて語り合ってもらった。

彼らの率直な意見や意識態度は、本学の留学生受入れ体制の充実のために充分活かされなければならないだろう。

出席者

呉 慶煥君（韓国、大学院商学研究科、修士課程、27才）

黄 躡鴻君（中国、大学院商学研究科、修士課程、24才）

張 琺姫さん（中国、商学科3年、27才）

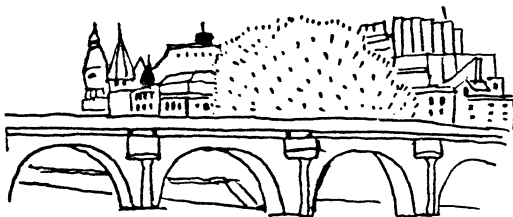
陳 亮宏君（台湾、経済学科3年、24才）

仰 英姿さん（中国、深圳大学交換留学生、22才）

司 会 西村禮二 国際交流係長

山内良一 国際交流委員

原口行雄 国際交流委員



司会 皆さんこんにちは。新学期もはじまって1ヵ月近く経ちました。皆さんも御存知のように本学の国際交流はアメリカモンタナ州の諸大学と1982年に姉妹提携を結んで、その後、韓国の大田大学校、中国の深圳大学とも協定を結びまして法人或は学生レベルで積極的に交流事業を行ってきました。

交流を始めて7年目位になります。今回、留学生受け入れの問題を国際交流委員会で取り上げて、在学中の呉さん、黄さん、張さん、陳さん、仰さんに、留学生27名の代表として、熊本で生活し、本学で勉強する上での経済的な問題とか学習の問題とかを話し合っ頂きたいと思うのです。

まず、留学生生活を通じての本学の印象、日本語の学習、日本人の学生との交流などお聞きしたいのですが、どうですか？

呉 ここでの生活は9割ほどは満足していますが多少足りない面があります。例えば、奨学金の問題、宿舎の問題です。今、留学生が一番困っているのはやはり経済的な面です。

奨学金の面で他の大学と比べてみたら、まず情報が遅いですね。大学の奨学金のことを担当している部門の情報に対する把握能力がまだまだです。ポスターは貼ってあってもそれに関する書類がない。積極的に学校側から留学生のためにそういう情報をそろえてやる、ある程度そんな係が必要ではないでしょうか。

宿舎は、僕はだいたい満足してますけど苦労してる方もいるようですね。だから、学校側が宿舎のことにもっと

力を入れてくれたらと思います。

司会 では一般の学生との交流についてはどうですか。

呉 非常に面白いです。僕は熊本商科大学に来て良かったと思っています。僕は非常に誇りを持っています。友達関係においての特別な苦労はないが、自分から積極的に話をせねば友達にはなれないと思う。

黄 僕も商大に来てつくづく良かったと思う。一番良い点は、商大が積極的に国際化を進める、というところです。

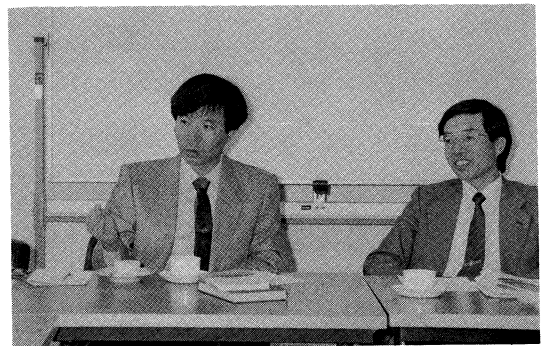
一番関心があるのは奨学金のことです。

日本の学生との交流は積極的に話しかけないといけない。希望としては日本人の学生も留学生に話しかけてほしい。サークルに入らないと友達ができないような、日本人にはそんな集团的傾向があります。

呉 韓国では、自分のわくを作って集団で行動することはめずらしい。

仰 私が日本に来て一番大変なのは勉強面です。勉強のペースが早くて、勉強の方に時間をとられて日本人との交流は時間がたりない。

呉 日本の大学では勉強しなくてよい。し



〈原口委員〉

〈西村係長〉

かし社会に出たら全く違う。大学時代は遊ばないと、会社に入ると厳しすぎて遊べない。

韓国は試験で人を判断する。日本人は知識より人格で判断する。人間は知識とかで判断すべきではないのだから……。

日本は、そういうところがすばらしいと思う。

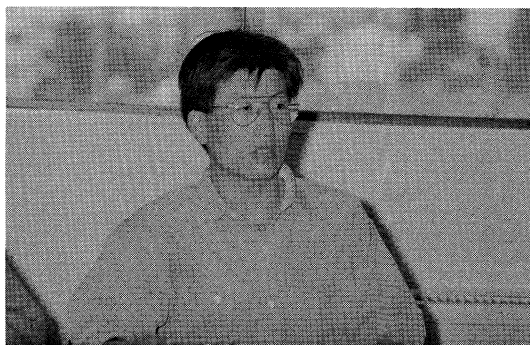
張 日本にはかなり勉強している人がいますよ。サークルと勉強を両立させている人もいて、すばらしいと思う。

奨学金・宿舎については先輩方と同じ意見です。2年間でつらいこともたくさんあったけど、いつも相談相手は友人でした。

陳 僕には先輩の留学生が商大にいなかったので授業は苦しい。単位の取り方も知らない。先生の授業内容もわからず、授業を取ってはじめてわかる。熊大では、1年間は皆で勉強して、2年目から独自で勉強できる。研究生、大学院生には担当の先生がいるが正規生にはクラスの先生だけですごく困っている。遊びの友人はたくさんできたが、一緒に勉強してくれる友人はいない。日本人の学生は試験前だけノートを借りにきたりするが、台湾ではそんなことをすると退学になる。

もっと厳しくして、先生の助言がほしい。

呉 先日、熊大の先生との座談会で奨学金の問題がでたが、奨学金のことは熊大に集中している。情報だけは商大にも入れてほしいと、熊大の先生に言ったら、「それは仕方ない。国立と私立は違う。」と言われた。びっくりした。商



〈呉くん〉

大の先生も学生に対してあきらめている。熊大と商大のレベルを比べて、でもそれは違うと思う。人間はそういう評価はできないはず。商大の先生にも学生に対して誇りを持ってほしい。

陳 熊本では熊大生がロータリーの奨学金をもらうようになっているが、大分県では違う。留学生は私立、国立関係なく、優秀であれば奨学金をもらう権利がある。

私が今痛感している問題は商大に留学生会がないということ。留学生会がない商大はまとまりがなくて、そこが熊大とちがっている。商大も留学生会をつくるべきですよ。奨学金情報の窓口にもなるし。

呉 奨学金はたくさんあるが、情報不足です。留学生全員に情報を流して下さい。正確な金額、しめ切りがわからない。はっきりした情報を窓口を一本化していつでも留学生が個人で行けるようにしてほしいのです。

陳 うちの姉は昨年熊大の研究生でしたが、1年間学生のチューターがついてました。同じ学科の学生が週2～3回一緒に勉強して日本語を教えてくれていました。



〈黄くん〉

司会 商大にも大学院生、研究生には担当の先生がついていますよ。学生の相談にものってあげてますからそう苦しいことはないでしょうが……。

黄 宿舎の件は、熊本県の宿舎や、肥後銀行、岩永組、増永組から提供して頂いています。非常にありがたいことです。ただ、提供は昨年からはじめましたが、宿舎を提供したのに留学生が借りてくれなかったという問題がおきました。距離、家賃の問題はあるけど何故借りてくれないのだと問題になるんです。確実に入るのであれば紹介してあげますが。宿舎に関しては信頼性のあるところを選ぶこと。ボランティアにしても安く貸して夜に働かせたりするところがあるので注意して下さい。現在、民間企業が留学生を受け入れる大家さんに情報を入れ、それを国際交流室や学生課に流すといった方法が行われています。

黄 非常に助かっています。

司会 現在は数が限られているけど企業にもお願いして入れるようにしている。そのかわり、留学生の方も必ず入ってほしい。貸し手と借り手がきちんと結びついていかないとね、いろんな問題

が出るのが去年の反省から出ています。それから、先生方の御好意によって家具調度品関係を提供して頂いてるでしょう。

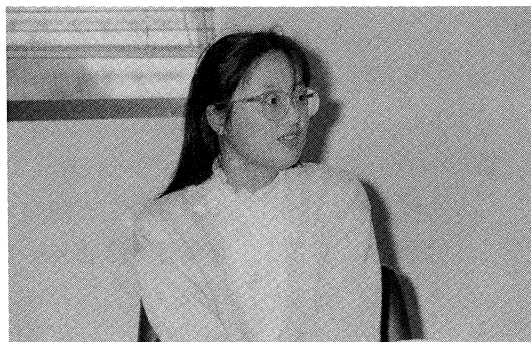
呉 非常に助かっております。恵まれていると思います。しかし、だからといってお金を持っているとはいえないと思います。ほとんど自費です。留学生だから皆お金を持っていると思われては困る。今、レートは1:5です。送ってもそれ程のお金になるわけでもない。ある面でそれを理解してほしい。

黄 中国では外国偽替は持ち出し禁止ですから、全く仕送りではできません。中国の留学生はその面で苦しんでいます。アルバイトをみつけようがんばってますが、奨学金をもらえれば勉強に専念できるわけですから。

司会 つまり現在宿舎と食費が一番の問題なんですね。

仰 私の場合は交換留学生として、日本学生との交流は少ないです。友達が欲しい。友達を作る場合はサークルかアルバイトに限られていますからね。

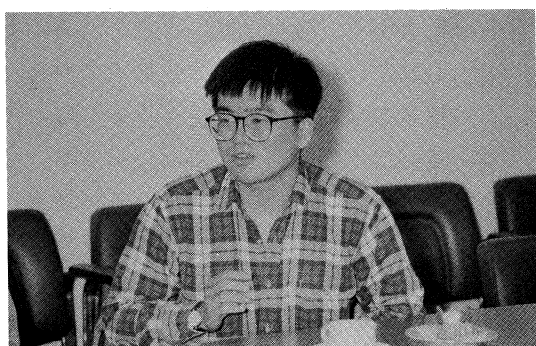
しかし交換留学生がバイトをしたらおかしいと思われる。もっと友達を作る場が欲しいのです。ゼミの学生とも



〈張さん〉

私の勉強が忙しくて話す機会も友達を作る機会もない。

陳 表面的な友達がたくさんいるけど、心を通じ合える友達は1人もいません。まず考え方が違いますね。年齢も違うし目的も違う。話しが合わなくて、1度話しただけで友達になれないと思ってしまう。



〈陳くん〉

仰 私の場合、一番困ってるのは言葉です。私の日本語はまだ不十分。友達まで作る余裕はありません。

陳 中国語のクラスで勉強している日本の学生と中国から来ている留学生で1回位、顔を合わせたりすればどう。韓国の方も一緒にね。韓国語を知らない人でも興味を持って人はたくさんいますよ。だから友達にはなりやすいと思う。

中国語を選択してる日本学生と仲良くなれなかったとしても先生と仲良くなれるでしょう。先生も全く留学生のことを知らないですからね。中国語、韓国語が通じるからそれを通して日本のことがわかってくる。そうでしょう？一番友達になりやすいと思いますよ。目的が同じだから。

司会 それでは、健康の面はどうですか。

陳 日本の留学生に対する健康保険制度はすごく良いのでほとんど問題ありません。できれば国民健康保険に入った方がいいと思う。

司会 今、国民健康保険も、県の方で、留学生支援として全員に補助するというプランができつつあります。

呉 僕がいつも行く医者はほとんどお金をとりません。200円程しかとらない。

司会 民間でも留学生向けにはほとんど無料というボランティア団体の医師団があると聞いてます。

ところで、食事の面、日本の習慣、その他の問題はどうか。

呉・黄 食事はほとんど自炊です。

仰 私は日本の生活習慣をあまり知りませんが、人間関係が非常に難しいと思っています。

司会 それは日本の学生も同じです。だからこちらから積極的にふれ合いの場を作ろうとしています。

仰 中国の大学では毎週末にダンスパーティーがあります。だからそこで友達ができるのです。

陳 日本人は自分の気持ちをはっきりと言わない。中国人ははっきりと言う。行きたくなければ行かない、ダンスをしたくなければしない、と。

日本人は「……けど」と言うでしょう。本当は行きたくないのに。そこが大きくちがいます。おいしくなくてもおいしいと言う。中国人ははっきりとおいしくないと言う。まあそれは民族が違うから。

呉 僕は、日本人のそんなところはすごく良いと思いました。はっきりと言わないのは相手の気持ちを思いやっている



〈仰さん〉

からで。おいしくなくてもおいしいと言ってくれば作った方も気持ちがいいし。そこは日本人の長所でもあり、短所でもあると思う。

陳 本当のことを言わないと気持ちは一生通じないと思います。だから最初日本に来た時は苦しみました。

黄 日本語は言葉使いが一番難しい。先生、友達、目上、目下でいろんな言い方があるでしょう。日本語を勉強する上で一番頭が痛いところですね。

司会 仰さんは日本に来て3ヵ月目だけれど、日本の印象はどうですか。

仰 あまり外出しないのでよくわかりませんが、買い物に行くのに問題はないです。日本の生活はとても便利だし、サービスはとてもよいです。

陳 日本のサービスはロボットみたいですね。心を使っていない。機械的にやっている。中国人が「ありがとう」と言ったら、それは本当の「ありがとう」であって、日本のようなあいさつがわりではない。

黄 日本では先輩、後輩の区別がとてもはっきりしている。中国ではそれは考えられない。中国では先生は尊敬するが、先輩、後輩など能力的に変わらな

い人に対する区別はありませんよ。

陳 日本は先輩に対してはキチンとしていて、先生にはメチャクチャ。おかしいです。台湾では一番社会的地位が高いのは大学の先生です。

呉 ひとつ日本で変えてゆかねばならないと思ったのは、家族同志の交流、対話が少ないこと。

韓国ではキャバレーにだって家族で行きます。教育上悪いと思われるかもしれないが家族中心の生活ですから。日本では大人が子どもと手をつないで歩いている姿をあまり見ないですね。会社で働いてたまったストレスは家族との触れ合いを通じて発散すべきです。子どもは皆同じことをしていると思っているが、子どもは子どもなりに考えを持っている。だから家族との対話を通じてわかりあっていかねば。男が家庭の仕事を手伝って大切にしてゆかないとだめです。韓国では会社のパーティーでも必ず家族同伴で行かないと参加できない。そこから友達ができ、そして一生続くのです。

陳 それは台湾でも同じ。仕事中心でなく家庭中心の生活。家庭がなくなったらもう何もない。

呉 日本は豊かすぎるから、経済面はここでおさえ精神的な面を考えなくては。日本にも良い所がたくさんあるが韓国ではそこが良い所と思っています。

陳 日本人がもし今のまま仕事・会社を重要視していったら、人間味というものが冷たくて欠けてしまうのではないだろうか。

呉 日本人は1から10までスケジュールで動いてすばらしいと思うけど、人間的



〈全員で〉

に余裕も失敗も必要です。いつも上司のそばで緊張してずっと座って、時計ばかり見て……。そればかりが良いとはいえないでしょう。少しぐらい余裕が許されてもいいのではないのでしょうか。初めて日本のカラオケに行った時にはびっくりした。昼の顔と夜の顔が全々ちがうんだもの。

陳 日本に来た頃聞いたのですが、日本人と交流したいのなら酒を飲まないと言が通じない。本当のことを言ってくれないと。

それと、中国では学生が先生と一緒にお酒を飲みに行くなんて考えられません。

呉 僕は大学時代先生とよく飲みに行ったなあ。韓国では先生の前では酒も飲めない、タバコも吸えない。しかし先生がよいと言えば許された。日本で先生達と自由に飲みに行くのは良いことだと思います。

司会 最後にまとめとして、いろんな問題全て含めて、皆さんが今一番要望していることを一言ずつお願いします。

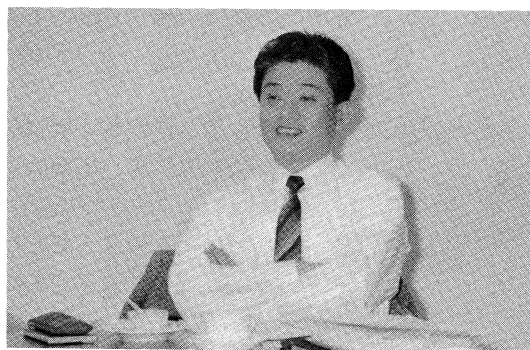
呉 商大に来て本当によかった。だいたい満足していますが、奨学金の問題に学校がもう少し力をいれて下さればと思っています。

黄 同じです。

陳 学習面です。

仰 日本語と学習面ですね。

司会 きょうは留学生のかかえる諸問題を聞いて、私達も気付かなかったいろんな意見を参考にしながら、よりよい留学生活ができるように努力してゆきたいと思います。本日はどうもありがとうございました。



〈山内委員〉

SEMINARS

国際交流室主催： 交換教授による教職員向け語学教室

1. 英語会話クラス

講師 ジョン・フートン先生 (米国・モンタナ州立大学)

a. 初級コース

開催日 2月より6月まで毎週水曜日

時間 17:10~18:10

場所 研究棟4階 小会議室

受講者 20人

b. 中級コース

開催日 2月より6月まで毎週火曜日

時間 16:30~18:00

場所 研究棟4階 小会議室

受講者 11人

c. 上級コース

開催日 2月より6月まで毎週木曜日

時間 16:30~18:00

場所 フートン先生の研究室

受講者 3人

2. 韓国語会話クラス

講師 金麟濟先生 (韓国・大田大学校)

開催日 4月より毎週木曜日

時間 17:10~18:10

場所 研究棟5階 小会議室

受講者 6人

3. 中国語会話クラス

講師 王曉敏先生 (中国・深圳大学)

開催日 4月より毎週木曜日

時間 17:10~18:10

場所 研究棟4階 小会議室

受講者 6人

海外研主催： 英語による特別集中講義 (3回シリーズ)

テーマ 現代アメリカの写真についての一考察

講師 ジョン・フートン先生 (交換教授)

日時 第1回 5月25日(木) 16:15~17:45

第2回 6月1日(木) 16:15~17:45

第3回 6月8日(木) 16:15~17:45

場所 本館4階 第1会議室

参加者 学生21名、教員14名、一般3名

海外研主催： 講演会

テーマ 海南島(中国海南省 経済特区)の現状と将来性
 講師 王佩儀博士(香港・中文大学・経済特区資料研究室主任)
 日時 5月31日(水)14:00~16:00
 場所 本館4階 第2会議室
 参加者 教員・一般35名

平成元年度 留学生名簿

正規生

No.	氏名	性別	国籍	学部・学科・年・組
1	孫 永 紅	女	中国	商学部・商学科・1年1組
2	劉 沖	男	中国	商学部・経営学科・1年1組
3	黄 啓 光	男	台湾	商学部・経営学科・1年1組
4	孫 躍 東	男	中国	商学部・経営学科・1年2組
5	林 倩 穗	女	台湾	経済学部・経済学科・2年3組
6	張 琍 姫	女	中国	商学部・商学科・3年4組
7	金 正 翰	男	韓国	商学部・経営学科・3年1組
8	楊 国 華	男	マレーシア	商学部・経営学科・3年1組
9	周 佩 文	女	台湾	商学部・経営学科・3年3組
10	陳 亮 宏	男	台湾	経済学部・経済学科・3年2組
11	韓 相 姫	女	韓国	短大・教養科・2年2組

研究生

1	陳 宝 剛	男	中国	商学部・商学科
2	原田 みち スエリ	女	ブラジル	商学部・商学科
3	徐 成 華	男	中国	商学部・商学科
4	鄭 凱 希	男	中国	商学部・商学科
5	温 雪 垠	女	中国	商学部・経営学科
6	譚 先 富	男	中国	商学部・経営学科
7	高群 ホセ ルイス	男	ペルー	商学部・経営学科
8	楊 兆 利	男	中国	商学部・経営学科
9	姚 耘	男	中国	商学部・経営学科
10	竹馬 ジョイス よし	女	アメリカ	短大・社会科
11	江 源	男	中国	短大・教養科

大学院生

1	黄 騰 鴻	男	中国	商学研究科・修士課程
2	呉 慶 煥	男	韓国	商学研究科・修士課程
3	劉 錦 銘	男	台湾	商学研究科・修士課程

交換留学生

1	羅 鋼	男	中国	商学部・商学科
2	仰 英 姿	女	中国	経済学部・経済学科

1989年前期 国際交流EVENTS

日付	モンタナ	大田
1月9日	ジョン・フートン先生（交換教授）来学	
24日	
2月1日	春期短期派遣留学生（4名）出発	
9日	金寛洙先生（交換教授）帰国
21日	故鰐沢健之先生の学園葬参列のため、林鴻 前理事長と金寛洙先生来学
23日	林鴻圭先生・金寛洙先生帰国
27日	
3月13日	宮崎俊策先生（交換教授）出発
20日	
23日	橋本祐二君（長期交換留学生）出発	
26日	春期短期派遣留学生帰国	
4月2日	田中利彦先生（交換教授）出発	
3日	金麟濟先生（交換教授）来学
5月24日	モンタナ州立大学代表来学	
26日	キャロル大学代表来学.....	大田大学校代表団来学.....
	モンタナ大学代表来学	
27日	
29日	モンタナ大学代表帰国.....	大田大学校代表団帰国.....
30日	モンタナ州立大学代表帰国	
6月1日	キャロル大学代表帰国	
6日	キャロル大生（短期交換留学生）来学	
9日	モンタナ大学国際プログラム担当者来学	
7月5日	第3回大田大学校学生研修団来学
10日	キャロル大生帰国.....	第3回大田大学校学生研修団帰国



	深 圳	そ の 他
主	<p>.....王曉敏先生（交換教授）・羅鋼君・仰英姿さん （長期交換留学生）来学</p>	
	<p>.....伊藤幸太郎君（長期交換留学生）出発</p>	
	<p>.....林田真奈美さん（長期交換留学生）出発</p>	
	<p>.....深圳大学代表来学</p>	
	<p>.....深圳大学代表帰国</p>	<p>.....姉妹大学代表団を迎えて、新本館落成式典日米友好基金理事長一行来学</p>

国際交流委員会メンバー

◎清野 健・古田龍助・勝部伸夫・山内良一
慶田 収・永末嘉孝・林日出男・柏野健三
原口行雄・星子三郎・西村禮二・鶴田智子
(◎は委員長)

〒862 熊本市大江 2 丁目 5 番 1 号

熊本商科大学
熊本短期大学

TEL (096) 364-5161
